

## セッションJ 「政治と精神分析の未来」

世話人：山本圭（立命館大学）

司会：乙部延剛（茨城大学）

報告：上尾真道（京都大学・非会員）、山本圭（立命館大学）

討論者：佐藤嘉幸（筑波大学）、松本卓也（京都大学・非会員）

### 1. 趣旨

近年、Brexit やトランプ勝利を受け、政治の合理主義的な捉え方に疑義が向けられるにつれ、人間の情動や情念の政治的役割に注目が集まっている。比較的最近の議論に限ってみれば、情念(passion)の政治的意義にもとづいたシャンタル・ムフの熟議民主主義批判をはじめ、マーサ・ヌスバウムが情感(emotions)の政治的役割に注目した議論が想起されるだろう。

感情をめぐる政治学が興隆するなか、情動と無意識についての学である精神分析理論は、政治学の分野にどのような貢献をするだろうか。この意味で、2014年に岩波書店から刊行された岩波講座『政治哲学 第6巻』に、「精神分析と政治学」という章が収められた意義は決定的に大きい。昨今のポピュリズムの台頭やポスト・デモクラシーといった政治現象を理解するにあたって、合理的説明では捉えきれない無意識の心の動きを扱う精神分析の諸概念、とりわけ享楽の問題は、政治学にも重要な手掛かりを提示するはずである。

司会には、政治思想を専門とする乙部延剛氏に、討論者には、現代思想、社会哲学の立場から佐藤嘉幸氏に、精神病理学・精神分析学の立場から松本卓也氏に登壇していただき、分野を横断した視座から、政治と精神分析の未来について幅広く議論することとしたい。

### 2 乙部導入

まず司会の乙部より、本セッションの趣旨と今日的意義、とりわけ政治と精神分析の関係についての導入が行われ、登壇者の紹介があった。

### 3. 山本報告「なぜ民主主義論は精神分析を必要とするのか？：欠如・対象a・享楽」

山本報告の目的は、ポスト・トゥルースの時代にあって、精神分析が政治理論、とりわけ現代の民主主義の理論にどのような貢献をするのかを検討することである。山本報告では、まず、20世紀における政治学と精神分析の関係を振り返った後、ラクラウのラディカル・デモクラシー論において精神分析が果たしている役割を、三つの段階にわけて検討を行った。そこで示されたのは、ラクラウの民主主義論が展開するにつれて、精神分析へのコミットメントが強まっていくこと、具体的には「クッションの綴じ目」や「欠如」概念を積

極的に使用し、最終的にはヘゲモニー論を対象 a の論理そのものであると断言するようになったことが示された。さらに、山本報告では、四つ目の段階として、ラクハウの理論から抜け落ちていた「享楽」を導入するヤニス・スタヴラカキスの議論を援用することで、精神分析がデモクラシーの理解に決定的に重要であることを議論した。また、最後に問題提起として、ラカン派の「女性の享楽」に今後のラディカル・デモクラシーの可能性を見るスタヴラカキスの問題点が示され、あるいはむしろ「男性の論理」のほうになおも意義があるのではないかということが示唆された。

4. 上尾報告「「すべてでない」時代の政治をめぐる試論——ポスト近代政治と「女の論理」」  
上尾報告では、後期ジャック・ラカンにおける重要な理論パラダイムである「女の論理」あるいは「非-全体の論理」の観点から、現代政治思想に対する貢献を探る試みを行った。

まず予備的作業として、「政治と精神分析」の両者が 20 世紀前半に持ち得ていた密接な関係について確認した。一方で社会-制度論的水準においては、精神分析は臨床実践として、社会構成の規則の変化に実質的な影響を及ぼしていた。また認識論的水準では、表象と情動の二つの系の葛藤を背景とする、新たな主体性の「解放」のモデルを提供した点で、マルクス主義のある側面との近接性が保たれてきた。しかし 20 世紀後半、特に 70 年代以降には、ポストフォーディズムや情報資本主義など、政治思想の諸前提における変化が明らかになり、「政治と精神分析」が思考される基盤にも大きな地殻変動が導入されてきている。それゆえ現在、唯物論思想の枠内に現代精神分析の理論と実践の意義を位置付けつつ、ここからの政治思想への貢献を汲み出す作業が必要であり、本発表はそれへの理論的貢献の予備的作業となる。

続いて具体的検討の素材として、バトラー、ジジェク、ラクハウの間で、ラカン派精神分析と政治の関わりが大々的に問われた著作『偶発性・ヘゲモニー・普遍性』を取り上げた。特にバトラーが提起する、(象徴的)「構造」の制限と、歴史的過程による政治的排除の区別をめぐる問いを取り上げ、この前者に重きをおくラクハウの応答を批判的に検討した。ここではラクハウの応答が、ラカンの「主人の言説」ないし「去勢」の理論を拡張するという仕方でなされていることを指摘し、その政治が常に「全体」を先取りしつつ (S1-S2)、外部の否定性を (a として) 実定化する作業である点に疑問を呈した。

他方、ラカンが 70 年代に切り開いた別の理論装置である「女の論理」に依拠することで、バトラーの問いに別の角度でアプローチすることができると思われる。ラカンの「女の論理」は、排除されるべき他性としての a を、いまだ包摂-排除の未決定な境界上にあるものとしての「実在しない女  $La$ 」へ向けて、図地反転する。そこでは構造的制限の余剰が、生きられる過程として再展開される。重要なのは、この「女の論理」を、後期資本主義の条

件を表現するものとして採用した上で、この過程の内部における幾つかの可能な身振りについて考察することであろう。本発表はこれについて、フロイトの「女性性」の理論にまで遡り、「ペニス羨望」概念に再検討を施した。フロイトはペニス羨望の三つの行き着く先を記述しているが、そのうち「男性性コンプレクス」は、過程の中での再主体化が、再び「男の論理」へ包摂され、マイノリティへの軽蔑を発展させる様を説明する。他方、フロイトがペニス羨望と女性性の接続として第三の道は、男性的権力形式をずらしつつ獲得する契機を孕む。そこでは権力と再生産の問いが合流するのであり、そこに非正統的で複数の政治的主体性の理論を考える手がかりがあるのではないかとの展望を示した。

## 5. 討論

討論では、まず松本が、70年代のラカン理論における性別化の式（男性の論理と助成の論理の区別）と50年代、60年代、70年代のラカン理論について概説し、「欠如の主体」や「空虚なシニフィアン」といった概念をもちいるラクハウとムフの議論が男性の論理ないし50-60年代ラカンの図式に収まることを指摘し、対してスタヴラカキスの議論が70年代的な「サントームの政治」に対応する可能性を示唆した。さらに、上尾の理論における〈他者〉の2つの読み方に注目し、その女性の論理との関係を示唆した。ついで佐藤討論では、2017年に邦訳の刊行されたスタヴラカキスの『ラカニアン・レフト』が批判的に検討された。ドゥルーズとガタリの議論をほとんど参照していないことを指摘し、あらためて具体的な政治状況への目配り、および下部構造へのコミットメントの重要性が指摘された。

## 6 フロアからの質問

最終日の最後のセッションであったが、フロアには43名ほどの人が集まったことから関心の高さが伺えた。フロアからは、女性の享楽と男性の享楽とはそれぞれどのようなものか、その具体的なイメージ・戦略について質問がなされた。つまり、対象 a を空白のままにしておく女性の享楽とは実際にはどのようなものなのか、また喪の作業を経て新たな対象 a を定めていく男性の享楽には、（特に左派にとって）今後どのような戦略がありうるかなど、セッション終了後まで活発な討論がなされた。